

山口県文書館所蔵絵図群の伝来と特質

杉本史子・河村克典・山田 稔
磯永和貴・横地留奈子

はじめに

これまで絵図は、単独で検討されることが多かった。しかし絵図を群としてとらえ⁽¹⁾、また、それらを取り囲む史資料群のなかでその作成・使用・保管の文脈をふまえて捉え直したとき、絵図はいままで以上に豊富な情報を私たちに与えてくれる。

以下、第Ⅰ章では、まず萩藩作成絵図の全体的な伝来の経緯を押さえる(河村克典)。続いて第Ⅱ章では、そのなかから、幕府提出を目的とした国絵図(磯永和貴)、第Ⅲ章では、藩内用の絵図(山田稔)について述べる。なお本稿でとりあげた絵図群の中から、色料についての科学的調査を行った。その結果については、本号収録「山口県文書館所蔵絵図に使用された色料についての科学的調査」を参照されたい。

(杉本史子)

Ⅰ 萩藩が作成した絵図の分離と形成

1. 研究史

萩藩が作成した絵図の研究は、これまでに山口県文書館所蔵「毛利家文庫」⁽²⁾「袋入絵図」⁽³⁾「地下上申絵図」⁽⁴⁾などに含まれる絵図・地図を利用しているが⁽⁵⁾、これらの史料群には江戸期だけではなく、明治以降の絵図・地図も含まれている。これらの史料群の形成については、それぞれの目録の解説や、また、「地下上申絵図」に関しては山田稔の成果によって概要を知ることができる⁽⁶⁾。しかし、これらの史料群全体が江戸期からどのような過程を経て、分離、形成されてきたかについては、まだ、十分には明らかにされていない。

本稿では、萩藩が作成した絵図が、明治期に選別、分離され、その後、それぞれの史料群がどのように移管され、さらにどのように形成されたかについて、検討してみたい。

2. 絵図目録

萩藩が作成した絵図に関して、江戸期に目録が作成されている。これについては山田稔が紹介しており⁽⁷⁾、「諸役所控目録」(毛利家文庫、9諸省40の6、以下、「諸役所控目録9-40-6」と略す)と、「諸役所控目録」(同、9諸省40の7、以下、「諸役所控目録9-40-7」と略す)、「諸役所控目録二 御什書惣目録御宝蔵」(毛利家文庫、54目次12の2、以下、「諸役所控目録54-2」と略す)の3冊がある。これらのうち「諸役所控目録9-40-6」は明和元年(1764)9月、「諸役所控目録9-40-7」は明和2年(1765)2月に、絵図方平田四郎左衛門が提出したものである。また、「諸役所控目録54-2」も同時期の明和元年に作成されている。

これらの目録に記載されている内容は、「諸役所控目録9-40-6」は「御城御取繕御窺」と「諸御用筋」からなり、「御城御取繕御窺」は「御城石垣八月六日大雨洪水にて天守曲輪南之方御門脇石垣崩候ニ付、築直之儀被仰出候図」（寛文4年）、「二丸御門外形南西石垣崩所御窺之図」（延宝4年）など萩城普請関係の絵図と文書で、「諸御用筋」は「御両国絵図」（慶安2年）、「防長国大道小道并灘道舟路之帳」（慶安3年）、「御城絵図」（慶安5年）などの国絵図、城下絵図と文書を含んでいる。また、「諸役所控目録9-40-7」は一村限明細絵図、村石高境目書・由来書、寺社旧記などからなる。「諸役所控目録54-2」は「御什書惣目録」、「故有雑文目録」から構成されており、このうち「故有雑文目録」に国絵図および関連文書の記載がある⁽⁸⁾。

これらの目録に掲載されている絵図の具体的な数量は、「諸役所控目録9-40-6」は絵図70件97点、「諸役所控目録9-40-7」は絵図67件818点、「故有雑文目録」は絵図15件110点で、合計では絵図152件1025点である。目録記載の絵図のうち、所在を推定・確認できたのは152件中110件で、これらは毛利家文庫、同遠用物、袋入絵図、県庁伝来旧藩記録等に分散している⁽⁹⁾。

3. 近代国家の成立と、絵図の選別・分離

明治4年（1871）の廃藩置県に伴い、絵図を含む旧藩記録は選別されて山口県と毛利家に引き継がれた。これについては、山崎一郎の研究成果⁽¹⁰⁾があるので、これを中心に紹介してみたい。

明治10年（1877）10月、毛利家編輯座は県庁へ貸し渡していた「譜録」の引き渡しを求める願書を提出しており、この時点ですでに毛利家と山口県との間で旧藩記録の選別・分離が実施されていたことになる⁽¹¹⁾。明治12年（1879）、「諸伺摘録其外」（毛利家文庫、諸省415）によると、租税課地理掛は「防長各村明細絵図」と「境目書及地下由来書」（現在の「地下上申絵図」と「地下上申」）を保存管理していた⁽¹²⁾。明治13年（1880）6月から旧記掛は、「旧藩中諸記録取調并引分」と呼ばれる毛利家所蔵の旧藩記録の調査を実施し、9月頃に終了した。これによって、それまで不完全であった毛利家と山口県との間での旧藩記録の選別・分離は一応完了した⁽¹³⁾。

この明治13年の「旧藩中諸記録取調并引分」の後も、県保存の旧藩記録が毛利家の申し出を受けて譲渡されたり貸し出されておられ、このことは、山崎一郎によると6回を確認できる⁽¹⁴⁾。最初の譲渡は、明治27年（1894）7月19日に行われた。譲渡されたのは、計8件である。第2回目の譲渡は明治6年（1873）で1冊であるが、正確には旧藩記録ではない。第3回目の譲渡は明治35年（1902）7月である。「御仕置帳」625冊、「分限帳」112冊、「無給帳」77冊など大量の冊子からなる記録が譲渡された。第4回目の譲渡は大正6年（1917）10月である。この時に譲渡されたのはすべて現在の「譜録」である。第5回目は大正12年（1923）である。この時には、360件、1,012点の旧藩記録が毛利家へ譲渡された。第6回目の譲渡は昭和2年（1927）である。県から毛利家へ141冊と2括りの旧藩記録が譲渡されたが、これらは翌年7月13日に返却された。

このように旧藩記録が山口県と毛利家との間で選別される中で、絵図に関しても二つのグループに分けられた。

4. 絵図を含む史料群

1) 毛利家文庫

(1) 毛利家文庫の管理

山口におかれていた「山口用達所」のなかの「編輯座」は、山口と萩に分置されていたが、明治6年(1873)に萩から記録類を山口に取り寄せ、「編輯座」の一体化が図られた⁽¹⁵⁾。毛利家と県との間での旧藩記録の選別・分離は、明治13年9月頃までに完了した⁽¹⁶⁾。その後、明治16年(1883)2月、山口にあった毛利家の編輯所は東京へ移転されることとなり、記録類も翌年にかけて東京の毛利邸に移管されている⁽¹⁷⁾。

昭和26年(1951)10月、東京毛利邸内にあった家史編纂所が閉鎖され、旧藩記録類、編纂書類が山口県に寄託されることになった。管理運用は県立山口図書館で行われることになり、「郷土資料室」が「毛利文庫室」に改装された。同年12月、毛利家寄託による「毛利文庫」約50,000点の受け入れが完了した⁽¹⁸⁾。

(2) 山口県文書館所蔵「毛利家文庫」

「毛利家文庫目録」を明和元年(1764)の「諸役所控目録9-40-6」と対比させると、「諸役所控目録9-40-6」の「御両国絵図」(慶安2年)、「御城下絵図」(同年)、「御城絵図」(元禄10年)、「御両国絵図」(同年)は、「毛利家文庫目録」の「防長両国大絵図」(毛利家文庫58絵図238-1、以下「正保238図」と記す)、「萩絵図」(同58絵図409)、「萩御城下絵図」(同58絵図410)、「周防長門一枚絵図」(同58絵図239)にあたることから⁽¹⁹⁾、江戸期に作成された絵図の一部が毛利家文庫に引き継がれていることが確認できる。

毛利家文庫には江戸期の他に、明治、大正、昭和戦前期の手書、刊行の地図が含まれている。毛利家文庫の絵図・地図は450件であり、そのうち明治以降については手書を除いた刊行地図は44件(内訳、明治36件、大正5件、昭和3件)である。これは毛利家文庫の約1割にあたる。これらのうち昭和期に刊行された地図の3件は、具体的には昭和5年(1930)刊行の「鉄道線路略図」(請求番号42)、昭和3年(1928)刊行の「伊能忠敬測量江戸実測図」(請求番号78)、昭和3年刊行の「東京都市計画街路修築計画平面図」(請求番号101)である。これらの明治以降の絵図・地図は、東京毛利邸の家史編纂所時代に収集されたものと推測される。

2) 県庁伝来旧藩記録

(1) 県庁伝来旧藩記録の内容

明治12年(1879)、租税課地理掛は、当時「防長各村明細絵図」と「境目書及地下由来書」(現在の「地下上申絵図」と「地下上申」)を保存管理していた⁽²⁰⁾。毛利家と山口県との間での旧藩記録の選別・分離は一応、明治13年9月頃までに終了している⁽²¹⁾。

明治25年(1892)作成の「旧記庫所蔵図書記録目録」(山口県文書館所蔵、県庁戦前A総務437)によれば、当時県庁で保管されていた旧藩記録は件数1,895件、点数は12,356点に及び⁽²²⁾、この中に他の旧藩記録と一緒に「防長各村明細絵図」が管理されていた⁽²³⁾。明治39年(1906)作成の「旧記庫所蔵図書記録目録」(山口県文書館所蔵、県庁旧藩記録1085)の場合、分類項目は「政法」「貢租」「系譜」「地誌」「雑」である⁽²⁴⁾。

明治40年（1907）、山口県から山口県立山口図書館へ「閩閩録」206冊、「防長古器考」161冊、「風土注進案」395冊が移管された。さらに、昭和5年には旧藩記録6,123冊が官房主事名で移管された⁽²⁵⁾。山口県立山口図書館は、昭和8年（1933）9月に山口県から移管された文書を整理して、「山口県委託藩政時代旧藩目録」「山口・小郡両宰判旧記目録」からなる『郷土志料目録、追加第二』を刊行した⁽²⁶⁾。本目録に収められているものは、「藩政時代防長に関係ある文書類」と「山口・小郡両宰判のみの文書類」（同、凡例）を山口県より山口図書館に委託を受けたものである。その後、昭和33年（1958）に設置された山口県文書館は、『郷土志料目録、追加第二』に含まれる絵図・地図を「袋入絵図」『諸文庫仮目録Ⅱ』、「地下上申絵図」『県庁伝来旧藩記録等仮目録』に分けて整理した。

（2）山口県文書館所蔵「袋入絵図」

「袋入絵図」に含まれる絵図・地図に関連のある目録を比較して、現在の山口県文書館所蔵「袋入絵図」がどのように形成されてきたのかについて、整理してみたい。「袋入絵図」の全体、又は一部を収録している目録は、次のようなものがある。

①「諸役所控目録9-40-6」

②明治25年作成「旧記庫所蔵図書記録目録」（県庁戦前A総務437、以下「明治25年旧記目録」と略す）

③明治39年作成「旧記庫所蔵図書記録目録」（県庁旧藩記録1085、以下「明治39年旧記目録」と略す）

④昭和8年9月「山口県委託藩政時代旧藩目録」『郷土志料目録、追加第二』（以下、「昭和8年旧藩記録目録」と略す）

⑤昭和8年9月「山口・小郡両宰判旧記目録」『郷土志料目録、追加第二』（以下、「昭和8年山口小郡宰判目録」と略す）

⑥山口県文書館所蔵「袋入絵図」

これらの目録を比較すると「袋入絵図」は少なくとも3つのグループのものから形成されている。Aグループ：萩藩が作成した絵図、Bグループ：山口県が作成した絵図・地図、Cグループ：山口・小郡両宰判で保管されていた絵図・地図の3グループで、以下に事例を紹介する。

〔Aグループの事例〕

Aグループは萩藩が作成した絵図の一部を明治初期に山口県が引き継いで、その後、山口県立山口図書館、山口県文書館へ移管されたものである。例えば、「袋入絵図」に収録されている「周防長門国高都合色分図」（請求記号9）は、明和元年（1764）の「諸役所控目録9-40-6」に「御両国絵図」⁽²⁷⁾の表題で、「明治25年旧記目録」、「昭和8年旧藩記録目録」には「周防長門国高都合色分図」で記録されている。

〔Bグループの事例〕

Bグループは明治期以降に山口県が作成した絵図・地図の一部が、山口県立山口図書館へ移管され、その後、山口県文書館へ引き継がれたものである。例えば、「袋入絵図」の「玖珂郡旧図（明治14年8月改）」（請求番号35）は、「明治25年旧記目録」には請求番号79、「昭和8年旧藩記

録目録」には請求番号0702-4816で収録されている。

〔Cグループの事例〕

Cグループは山口・小郡両宰判で作成された絵図の一部で、明治期には吉敷郡役所で保管され、その後、山口県立山口図書館、山口県文書館へ移管されたものである。例えば、「袋入絵図」の「山口宰判地面図」（請求記号142）は、「昭和8年山口小郡宰判目録」に請求記号0703-228で記載されている。

（3）山口県文書館所蔵「地下上申絵図」

現在の「地下上申絵図」はどのように形成されてきたかについて、整理してみたい。「地下上申絵図」を収録した目録にあたるものは、次のものがある。

- ①「諸役所控目録9-40-7」（明和2年）
- ②「旧記細目」（明治18年）（山口県文書館所蔵、毛利家文庫、地誌54）
- ③「明治25年旧記目録」
- ④「明治39年旧記目録」
- ⑤「昭和8年旧藩記録目録」
- ⑥「村絵図総目録」（山口県文書館所蔵、県史編纂所史料、「地下上申絵図」1312）
- ⑦「地下上申絵図」『県庁伝来旧藩記録等目録』

「諸役所控目録9-40-7」（明和2年）は、「地下図」488点、「清図」298点、合計786点、「旧記細目」（明治18年）は、「地下図」488枚、「清図」381枚、計869枚で「清図」が増加していることから、明和2年以降に、「清図」がさらに作成されていることになる⁽²⁸⁾。

明治12年（1879）、租税課地理掛は、当時「防長各村明細絵図」と「境目書及地下由来書」を保存管理していた⁽²⁹⁾。明治18年（1885）には、明治天皇山口行幸の展覧に備え、その当時に欠損していた地下図を補填するため、「清図」を11点、謄写して代用とした。この謄写図「新図」は現在の「地下上申絵図」に含まれている⁽³⁰⁾。

昭和5年、「地下上申絵図」は「地下上申」などと共に山口県立山口図書館に移管され⁽³¹⁾、昭和8年9月にはそれらを整理して、『郷土志料目録、追加二』が刊行された。この目録には「一村一枚限、彩色、成立及年代防長地下上申に同じ、村方庄屋等の奥書を附し絵図方頭人井上武兵衛差出」の解説があり、全体で797点があることが記されている。昭和13年（1938）には山口県史編纂所が「清図」（又は「地下図」）を謄写している。この絵図「写図」は300点あり、現在の「地下上申絵図」に含まれている⁽³²⁾。

このように、江戸期に「地下図」「清図」、さらに明治18年に「新図」、昭和13年に「写図」が作成されたが、現在の「地下上申絵図」には、山口県史編纂所以降のある整理段階で、大島宰判の計11ヶ村11枚が混入している。これは従来「地下図」と見なされていたものである⁽³³⁾。

5. 小括

江戸期、萩藩が作成した絵図は、廃藩置県に伴い、山口県と毛利家へ分離され、その後、山口県が保管していた絵図は、山口県立山口図書館を経て、山口県文書館へ移管され、「袋入絵図」

「地下上申絵図」の史料群に分けられた。また、毛利家側の絵図も現在、山口県文書館の「毛利家文庫」で保管されている。この「袋入絵図」「地下上申絵図」「毛利家文庫」には萩藩が作成した絵図の他に他の機関で作成、または収集された絵図・地図が含まれている。

萩藩が作成した絵図の全体像については、本稿で紹介した目録を突き合わせて、それぞれの絵図・地図の内容を検討すると細かいことまでわかるが、それは今後の課題である。

(河村克典 山口市立阿東中学校)

II 幕府への提出図—国絵図

1. 国絵図とは

江戸幕府は、諸大名に命じて国・郡を描いた国絵図を慶長・寛永10年・寛永15年・正保・元禄・天保の6度におよんで献納させた。また、幕府は寛永10年・同15年・正保・元禄の国絵図を編集して日本図を作成したのであった⁽³⁴⁾。

山口県には、宇部市立図書館に慶長周防・長門国絵図が、山口県文書館には寛永10年・正保・元禄・天保の各周防・長門国絵図が所蔵され、その残存率の高さは全国的にも稀有である。ここでは、これら5時期の周防・長門国絵図についてこれまでの研究成果⁽³⁵⁾を紹介し、今回の調査対象とした正保・天保国絵図のうち、正保国絵図である「正保238図(防長両国大絵図)」の検討を行うものである。

慶長国絵図は、幕府開設の翌年の慶長9年(1604)に献納の命が下った。現存の国絵図は西日本ばかりで、豊臣系大名を中心に献納が命じられたようである。慶長10年(1605)4月には2代将軍秀忠が就任したので、国絵図の提出は家康の最後の命であり、図は2代将軍秀忠に献納され、徳川政権が継続を大名達に強く印象付け、幕府が実質的に確立したことを世に知らしめた。

周防・長門国絵図(紀藤家文書9、国重要文化財)は、萩本藩家老で宇部を領し、幕府と慶長国絵図の交渉を行った福原家に伝来したものである。また、絵図の裏書には「京進ノ控」とあって、幕府と共に朝廷へと提出された慶長国絵図の控図とみなされるのである。

図の内容を見ると、萩城のほかに下関市長府の櫛崎城が、周防国絵図には山口市の鴻峯城と岩国市の横田城(岩国城)が描かれている。櫛崎城・鴻峯城・横田城はいずれも元和元年(1614)の一国一城令により廃城となっており、それ以前に作成されている。また、防長両国の総石高は、慶長5年(1600)の表高である298,480石2斗3升である。さらに、長門国は8郡であるが、寛文印知で6郡になる以前の郡数となっている。本図は、慶長国絵図の控図とみなしてよい。

寛永10年(1633)の国絵図には、幕府がはじめて諸国に派遣した巡見使に対応するためにあらかじめ作成した図と、その後に巡見使自らが作成した図の2種がある。対応のために作成された図は、巡見使一行約300人のルートと宿泊・休憩所確定のためと、図により御国廻を実施し、その信憑性を確認することに目的があった。巡見使の派遣が決定されると、肥後・米沢・鮑田・仙台の諸藩が国絵図を作成して提出している。

山口県文書館所蔵の「周防国絵図」(「袋入絵図」3)「長門国絵図」(「袋入絵図」4)は、巡見使に事前に提出した国絵図と考えられる。本図は慶長国絵図と同一の縮尺で描かれるが、慶長国絵図に比べて村の記載と道路網が詳細であり、萩城と横山城のみを描き、慶長国絵図より後の作成である。しかし、正保国絵図とは記載内容が顕著に異なり、正保以前に作成されたとみられ

る。この国絵図は、巡見使の派遣にあたり提出された国絵図と考えられよう。

巡見使は、幕府に担当した地域の国絵図を提出した。毛利家文庫所蔵の「日本図」（国絵図68枚、毛利家文庫58絵図26）は、この巡見使が作成し幕府へ献納した図の書写図である。周防・長門国絵図は、慶長国絵図をもとに作成したので図形はかなり似通っているが、正保国絵図とは異なる。また、上述の巡見に際して提出された国絵図には萩城と横山城の記載されるのに対し、本図では萩城のみが記号図式で、あとは「府中古城」（櫛崎城）、「山口古城」（鴻峰城）、「岩国古城」（横山城）と表記されている。なお、毛利家文庫58絵図33、54、193の3枚組の「日本図」は、この寛永10年の巡見使国絵図を基にした「日本図」と考えられる。しかし、寛永15年の国絵図と日本図については提出の記録はあるものの図は現存していない。

正保国絵図の作成事業は、寛永21年（1809）12月に幕命により始まった。正保国絵図の編纂にあたり幕府の示した作成基準は40条におよんだ。各絵図元は、国絵図が完成すると江戸の幕府総責任者である井上政重のもとに持参し点検を受けて書き換え、最終的に幕府へ献納した。従って、各絵図元の作成した国絵図は1枚に限らず、2枚以上におよぶこともある。また、正保国絵図は明暦3年（1657）の大火により多くが消失し、再度提出を命じられた絵図元も多かった。また、元禄国絵図の作成にあたり幕府は正保国絵図を貸し出して書写させている。これらの点を踏まえ、正保期の周防・長門国絵図について次節において検討を行う。なお、本図については色料の科学的調査を行った。

元禄国絵図は元禄10年（1697）に幕府の命令が下り絵図元は作成を開始した。しかし、元禄12年（1699）12月に国境筋に関する再調査が幕府から要請され遅延し、全ての国絵図の献納を終えたのは同15年（1702）12月であった。萩藩では元禄10年2月の幕府命令により元禄国絵図の編纂事業に着手し、同11年（1697）5月に下絵図を完成させ江戸本郷に設置された絵図小屋に持参し点検を受けた。同年6月には修正した国絵図を提出したが、再び修正の指示があり、同年11月に元禄国絵図を完成させた。しかし、上述のように同年12月に国境筋に関する幕府からの再調査の要請により、隣国との交渉を重ねて絵図に国境の説明書きが加えられて元禄14年（1701）に完成し翌15年に献納を終えたのであった。

山口県文書館に所蔵される「周防長門大絵図」（毛利家文庫58絵図246-1、2）は、この元禄期の絵図の書写と考えられる。本図が収められた木箱の箱書によると元禄12年から14年にかけて作成した元禄国絵図を同15年（1702）に萩城の御宝蔵へ納め、明和6年（1769）に御用のために江戸へ運び、安永元年（1772）の火事によって消失した。そのため、寛政3年（1750）に国許の絵図方に所蔵されていた元禄国絵図を書写したのが本図であるとする。なお、元禄国絵図の国境調査にかかわる「縁絵図」も現存している。

天保国絵図の献納はこれまでの方法と異なり、天保2（1831）年に郷帳の提出が幕府から命じられ同6年（1835）に献納を終え、そうして国絵図の調査が命じられ同9年（1838）に完成した。また、この国絵図の調査はこれまでとは異なり、元禄国絵図を薄紙に書写した「切絵図」に、元禄以降の変化や修正箇所を別紙で貼り付けた。この「切絵図」が幕府勘定所へと提出され、幕府は自ら清書を行ったのであった。山口県文書館所蔵の「御両国絵図」（毛利家文庫58絵図244-1。以下「天保244図」と記す）は天保期のものであり、今回の科学的調査の対象とした図である。

2. 科学的調査対象図—正保・天保の周防・長門国絵図

ここでは、今回の調査対象となった山口県文書館所蔵の正保・天保の周防・長門国絵図についてとり上げる。特に正保国絵図について検討する。上述したように正保国絵図は、幕府の点検を受けて書き換えを行っており数枚が作成された場合も多く、完成した図も明暦の大火消失して再提出された図や、元禄国絵図の作成時に正保国絵図の書写した図などがみられる。そこで、調査対象の「正保238図」について、その作成年代について再検討を行う。

本図についてはすでに川村と喜多の検討があるが、今回の研究においては、「正保238図」とそれを納めた木箱、江戸留守居の福間彦右衛門が記した江戸藩邸の日記である「公儀所日乗」(別名「福間帳」、毛利家文庫19日記4)の調査を行った。

まずは、正保周防・長門国絵図の編纂過程をこれまでの研究によりながら概観する。正保元年(1645)2月16日に幕府総責任者の大目付井上政重と同宮城和甫によって萩藩に国絵図の献納指令が伝達された。正保周防・長門国絵図は、萩藩主の毛利秀就が絵図元(担当者)となり、実際には幕府との交渉には萩藩江戸留守居の福間彦右衛門が、図の作成は萩藩絵図役人の江木二郎右衛門(後に加藤平兵衛も加わる)が担当した。

正保2年(1645)6月には阿武一郡の絵図が完成し、それを絵図役人の江木と清書を行った萩藩御用絵師の狩野太郎右衛門が江戸へ登り大目付の井上へ持参して指導を受けた。正保3年(1646)8月には防長両国の下絵図ができ上がり、再び絵図役人の江木が江戸に出向いて大目付の井上に指示を仰いだ。井上の点検の結果は、長門国絵図では毛利秀元(長府藩・4万7千石)領、周防国絵図では毛利就隆(下松藩・2万石)領が図示されていないことが指摘されたのであった。これに対して、萩藩は提出した下絵図の通り防長両国を本藩領として図示するか、長府・下松に加えて吉川広正(岩国領・3万石)領を図示するかのどちらかであった。再調整した国絵図を正保4年(1647)11月に持参するものの、再度の調整が求められている。結局、萩本藩が求めた長府・下松領の色分けしないという願いは届かず、大目付の井上が指示した通り萩藩領以外に長府・下松領が図示され、慶安2年(1649)8月21日に井上へ献納されたのであるとするのがこれまでの研究結果である⁽³⁶⁾。

さて、現存する山口県文書館の「正保238図」は、この慶安2年(1649)8月21日に大目付の井上へと提出された図なのであろうか。今回の調査によって木箱の表にかなり摩滅しているが墨書がみられることが判った。はっきり読み取れるのは「周防長門絵図」であり、2ないし3行にわたるほとんど読み取れない文章があり、その最後に「…絵図…江木二郎右衛門之調」と記されていることが確認できる。

すでに指摘のように「正保238図」の木箱の裏面には「入日記」が貼り付けてある。これは、文化8年(1811)8月に記載されたものであり直ちに信用できないが、「一、防長両国之絵図式枚、但、慶安式八月廿一日井上筑後守殿江、同年十一月廿日曾根源左衛門殿江被指上候御控江木次(「二」の誤記)郎右衛門調之」とある。これによると慶安2年8月21日に井上政重、同年11月20日に曾根吉次へ提出した国絵図の「控」とある。

これもまた周知の事実であるが、防長両国絵図の裏面にも同趣旨の文章がみられる。「慶安式八月廿一日ニ井上筑後守様、同年十一月廿日ニ曾根源左衛門様へ被指上候控江木二郎左衛門調之」とある。これは、「筑後守様」と「同年十一月…」の間にやや字間が空いており、「井上」ではな

く「曾根」へ提出したものの「控」であるかの様にも読み取れるように思われる。

「公儀所日乗」の慶安2年(1649)8月21日には、「井上筑後守殿へ御国絵図并石高一紙致持参、惣山市之丞へ相渡置候」とある。しかし、これに続き「請取置後々者御沙汰ニ而相替様子も出有之者、重而可申聞之由ニ江木二郎衛門・加藤平兵衛存候、右之絵図大躰者、既ニ出来候へ共甲斐守殿・日向守殿御領色分御好之分ニ調替、其上書付ニも色々御好候て、手間入延引候て如是候事」とあり、この日に提出完了ではなくまだ場合によっては書き換えもあることが示唆されている。この後に「公儀所日乗」には、国絵図の記載はない。

以上の記述からは、井上への提出図と曾根への提出図とがまったく同一の内容・仕様であったのかなど、両者の相互関係は必ずしも明確には判断し得ないが、正保238図は幕府提出図の控である可能性が高い。

最後に「天保244図」について検討を行いたい。同図の木箱の蓋には来歴が記載されている。

元禄之度大公儀被差上候御国絵図・郷帳年曆相候ニ付、天保式卯年御国高取調被仰出候処、御調出来ニ付、今般国絵図之儀茂御改仰出候、依之元禄之度絵図写、相渡候間、往還并海岸通、川筋、其外新田、村々ニ至マテ不洩様、当時之地模様、右絵図ニ掛紙ニ直シ候様、天保六年被仰出、右御渡相成候写図エ掛紙ニテ直シ、天保八年御勘定所被差出候控、委細之記録絵図方ニ有之、

「天保244図」は、周防国6巻、長門国7巻の「切絵図」となっており、薄い紙に淡彩で描かれ懸紙(訂正用付箋)による修正がみられ、上述した天保国絵図の特徴と一致する。本図は、天保6(1835)年に作成を開始し、同8年(1837)に幕府勘定所へ差出した天保国絵図の控であると思われる。

(儀永和貴 東亜大学人間科学部)

Ⅲ 藩内用の絵図

1. 地下上申絵図の概要

1) 地下上申絵図とは

「地下上申絵図」⁽³⁷⁾とは、享保期以降、萩藩絵図方が作成した防長両国全域におよぶ村絵図群の総称である。

作成者は、絵図方頭人井上武兵衛、絵図方平田仁左衛門・同四郎左衛門、郡方地理図師有馬喜惣太で、これに複数の手子が加わっている。平田家は、絵図専門の家である。有馬喜惣太は、近世防長を代表する絵図作成者で、作品としては、「地下上申絵図」のほか、萩藩主の御国廻り(領内巡見)の順路を描いた美しい街道絵図「御国廻御行程記」(毛利家文庫30地誌57)7帖のほか、国指定重要文化財「防長土図」などがある。萩藩御用絵師雲谷派に学んだ影響で、その作品は絵画的にも優れた出来映えで、一目瞭然たるものがある。

作成期間は、絵図本体に記入された年紀によれば、享保12年(1727)から宝暦3年(1753)まで26年間の長期に及んでいる。

作成方法は、両国内各村の庄屋に対して、村絵図(並びに石高書・境目書・由来書)の提出を命じ、その後に絵図方で統一的に清書するというものであった。したがって、本絵図群は、大きく2種類の絵図から構成されている。

一つは、「地下図」（地下絵図）と称されるもので、各村から絵図方に提出されたものである。

「地下上申絵図」の最大の作成目的は、当時の村々の境界を明確にすることであった。このため、境界の表記は詳細である。特に「地下図」は、証拠書類としての性格から、庄屋・畔頭ら村役人連中の奥書、署名、捺印はもとより、料紙の継ぎ目にも印が捺されている。形状は、元文年間までは方形が主流であるが、寛保以降は村境界に沿って切り抜いたものになっている（写真1）。



（写真1）「阿武郡奥阿武宰判下田万村地下図」（地下上申絵図995）

ところで、「地下図」は、各村から絵図方に提出されているが、実際に絵図を作成したのは、絵図方ないしはその手子たちである。初期の「地下図」は様式が区々であるが、事業が進行するにつれて徐々にまとまりを見せ始め、寛保元年（1741）以降は、後述の「清図」と彩色を除いてほぼ同様の仕上がりとなっている。

もう一種類は、「清図」（清書絵図）と称されるもので、絵図方が「地下図」をもとにして統一的に清書した絵図である（写真2）。

縮尺は3600分の1で、すべて村境界に沿って切り抜かれた形状である。美しい彩色が施され、絵画作品としても遜色ない出来映えである。図中の記載内容も豊富で、郡・村名から字名まで地名表記は詳細である。また、高山はもとより、村内の主立った山名が記入されているのは貴重な情報である。街道は赤線で示し、河川やため池も描かれ、人家・寺院・小堂・米蔵・一里山・高札場・勘場・御茶屋・駕籠建場・橋などの建物施設は記号印で示されている。方位は、「東」「西」「南」「北」が丸枠で四方に示され、村境部分の要所々々には、境界に関する注記がある。

「清図」は、ジグソーパズルのように接合できる点が特徴で、最大郡単位での接合が可能である。村境付近には、いろは文字の合紋があり、それを目安にすれば接合が容易になる趣向で、全



(写真2)「阿武郡奥阿武宰判下田万村清図」(同996)

体の合紋配置と接合状態を示した「合紋図」2枚⁽³⁸⁾が残っている。

ただし、「清図」はすべて完成しておらず、全村の約86%の作成に留まっている。

「地下上申絵図」は、寛延3年(1750)頃に、一応の完成をみたとして、萩城内の書院で重役たちに披露されている。しかし、当然のことながら、境界の変更や地形の変化などに対処する必要があり、その後も修正や清書作成が継続され、その作業は絵図を家業とする平田家に任せられた。

現存する「地下上申絵図」は、「地下図」458枚、「清図」377枚、控えないしは作成半途の「清図」(副図)157枚の計992枚である。このほかに、収納用の帙が56点ある。

このほか、「地下上申絵図」の台帳として、「絵図石高附地下由来寺社旧記根帳」(享保10年～弘化2年⁽³⁹⁾)3冊、「諸役所控目録」(明和2年)1冊、「旧記細目」(明治18年頃)1冊の、計3種類5冊が残っている⁽⁴⁰⁾。

「地下上申絵図」と同時に、各村から村石高書・境目書・由来書が提出されている。これらは維新後、山口県庁に引き継がれ、明治10年代、内務省修史局の指令による皇国地誌編修に関連して、原本を清書して96冊に編集し、「地下上申」の総合標題が付けられた。村絵図も同様に県庁へ引き継がれたが、戦前の一時期、山口県史編纂所の保管となり、その際に「地下上申附録村絵図」の名称が付けられた。これは文書中心の発想に基づくものであり、近年の研究の進展によって、付録扱いは誤りであることが明らかになっている。現在の名称「地下上申絵図」は、部分的に修正されているが、その影響を払拭し得ていない。なお、藩政期の総称は「明細絵図」であり、明治期の台帳「旧記細目」では「一村限明細絵図」と称されている。

2) タイプ別の特質

「地下図」と「清図」は、その形状や自然地形等の描写・彩色方法などの特徴に注目すると、いくつかのタイプに分けることができる。

「地下図」にはタイプⅠ～Ⅳの4種類がある。

【タイプⅠ】(190枚、全体割合約41%)

全タイプのうち最多で、形状は方形である。

山の形は、空中の一視点から、見えるままに描かれており、地形の細かな入り組みは表現されない。様式は統一されておらず、地域や村によって仕上がりに差がある。地下役人たちの奥書は概ね表面にあり、村石高と東西南北の里程が書き加えられるケースが多い。また、図中に凡例を示したものが数例ある(写真3)。



(写真3)「豊浦郡長府領八道村絵図」(同1212、部分)

【タイプⅡ】(86枚、全体割合約19%)

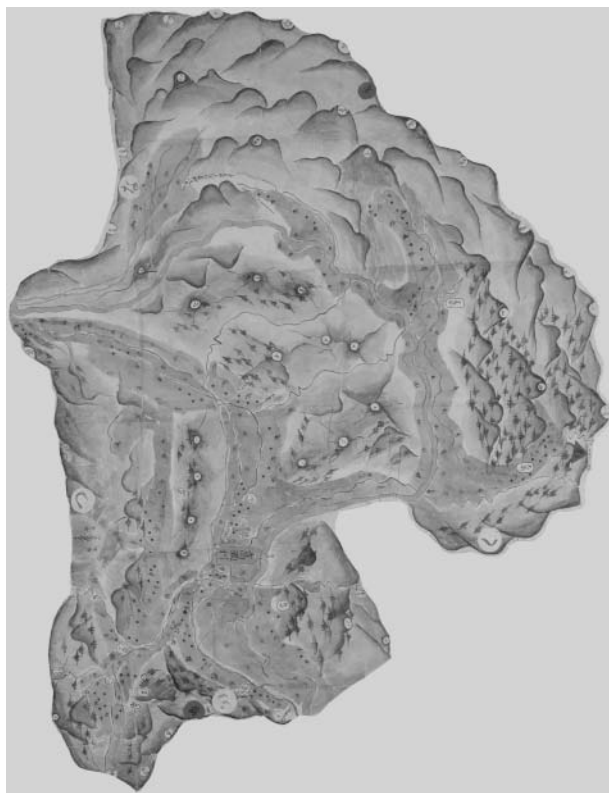
村境に沿って切り抜かれた形状である。視点を地面に垂直な高所に置いて描かれており、稜線が墨描線などで示される。大島・上関・徳地宰判では、それぞれ様式がまとまっており、一宰判内を同じ作成者が担当したと思われる。地下役人の奥書はいずれも裏面に記されているが、上関・徳地宰判では差出し年がない(写真4)。

【タイプⅢ】(52枚、全体割合約11%)

村境に沿って切り抜かれた形状である。タイプⅡより全体的に地図としてさらに進んだ様式になっており、タイプⅡからⅣへの移行期のものとみられる。

【タイプⅣ】(130枚、全体割合約28%)

視点が空中のかなり高所に置かれており、垂直方向から見た地形描写で、尾根筋が白い筋(塗り残し)で表現されているのが特徴である。前山代・奥山代・奥阿武宰判など、中国山地に集中している。建物などは「清図」と同じ記号印が使用され、彩色が簡略化されている点を除けば、



(写真4)「佐波郡徳地宰判高瀬村地下図」(同417)

「清図」と同様の仕上がりである。隣村と接合可能であるが、多くの場合、合紋は付されない(写真1)。

なお、「地下図」全体として、差出し年の最も古いものは、享保12年(1726)12月の長府領八道村であり、最も新しいものは宝暦3年(1753)5月11日の奥阿武宰判須佐村である。

差出し時期は、山口・小郡・船木・吉田・美祢・先大津・前大津宰判・清末領・長府領が早く、次いで大島・熊毛・都濃・当島・浜崎宰判が続き、奥山代・前山代・奥阿武宰判、岩国領、徳山領が遅い。地形の起伏が比較的穏やかな地域から始まり、中国山地の阿武・山代地方が終わりになっている。

「地下図」のタイプは、事業が進むにつれてタイプⅠからⅣへと移行している。すなわち、事業開始の享保期はタイプⅠが主流であるが、元文期に入るとタイプⅠ～Ⅲが混在するようになり、事業半ばを過ぎた寛保～宝暦期では、タイプⅣが大半を占めている。

清図はタイプA～Eの5種類に分かれる⁽⁴¹⁾。

【タイプA】(49枚、全体割合約12%)

彩色は全般的に淡色系で美しく丁寧である。記号印で示される建物・施設における屋根と壁の塗り分け、樹木での幹と枝葉の描き分け、岩場や砂浜のきめ細やかな描写など、細部にわたって手が施されている。仕上がりからみて、有馬喜惣太の作品とみてよい。吉敷・大津・美祢郡のみに見られる仕様である(写真5)。

【タイプB】(32枚、全体割合約8%)



(写真5)「吉敷郡山口宰判恒富村清図」(同523)

地形の描き分け方など基本的にタイプAに準じるが、彩色が濃色系で、郡名・方位・合紋が全く記されない点でAタイプと異なる。厚狭郡のみに見られる仕様である。

【タイプC】(172枚、全体割合約44%)

A・Bにくらべて、視点を地面に垂直な高所に置いて描かれている。尾根筋を2本の墨描線で描いた後、線間を塗り残すことによって、尾根筋があたかも白線のごとく表現される。彩色や記号印などA・Bと同様であるが、樹木描写は簡略化されており、彩色など細部の仕上げに繊細さを欠く。

【タイプD】(140枚、全体割合約35%)

基本的にタイプCと同仕様だが、樹木が手書きではなく記号印が使用されている点で異なる。全体的に地形描写や彩色の粗略さが目立つ。Aは図中に郡名が記されるが、C・Dでは郡・宰判名が朱印で示されている(写真2)。

【タイプE】(2枚、全体割合約0.5%)

阿武郡椿東分と大井村のみに見られる。基本的にタイプCと同仕様だが、尾根筋が彩色される点や、彩色が濃色系かつ丹念な点で異なっている。

「清図」も「地下図」と同じく、事業の進捗に合わせて、タイプAからDへと移行し、地図的要素が強くなっている。精度に関してもレベルは高く、見島(萩市)を例に取った場合、時代差を勘案すれば、現在の2万5千分1地形図と遜色ない出来映えである。

3) 色料の科学的調査対象図

今回の調査対象絵図は、「地下図」・「清図」それぞれのタイプから代表的なものを選んだ。その内容は次のとおりである。

No.1「豊浦郡長府領八道村絵図」〔地下図I〕

享保12年(1726)12月 226×173cm

(県庁伝来旧藩記録 地下上申絵図1212)

〈14〉 山口県文書館所蔵絵図群の伝来と特質(杉本・河村・山田・磯永・横地)

差出し年の最も古い地下図である。本絵図を作成するため、絵図方が現地へ赴いた際の地元の応接記録によれば、「御絵書之由」として内山藤助の名前が見える（西山家文書⁽⁴²⁾）。なお、絵書き内山藤助の経歴は不明。本図は村絵図作成事業のスタート作品として注目される。なお、八道村は長府領である。なぜこの村絵図作成事業開始にあたって、萩本藩領ではなく支藩領から始まっているのか、大変興味深い（写真3）。

No.2 「佐波郡徳地宰判高瀬村地下図」〔地下図Ⅲ〕

差出し年なし（元文2年7月カ）136×105cm（同417）

徳地宰判の「地下図」は、全体的に濃い茶系の仕上がりととなっている（写真4）。

No.3 「玖珂郡岩国領藤谷村地下図」〔地下図Ⅳ〕

寛保3年（1743）10月25日 100×96cm

（同1071）

「地下図」が、「清図」とほぼ同仕様に変わる時期のもの。

No.4 「阿武郡奥阿武宰判下田万村地下図」〔地下図Ⅳ〕

宝暦3年4月 223×121cm

（同995）

「地下図」の最終期の作品である。宝暦3年4～5月にかけて作成された奥阿武郡須佐村・上小川・下小川・上田万・下田万・江崎村が最終グループである。「地下上申絵図」全体で、最も美しくかつ精細な仕上がりのグループである（写真1）。

No.5 「吉敷郡山口宰判恒富村清図」〔清図A〕

78×50cm（同523）

淡い色調で描かれ、彩色・文字書き込みも丁寧である。作成者は、萩藩郡方地理図師有馬喜惣太と推定される（写真5）。

No.6 「阿武郡奥阿武宰判下田万村清図」〔清図D〕

220×120cm（同996）

No.4に対応する「清図」である（写真2）。

No.7 「阿武郡当島宰判椿東分清図」〔清図E〕

228×115cm（同872）

2例しかないタイプEのひとつ。

2. 御国廻御行程記

「御国廻御行程記」⁽⁴³⁾は、萩藩絵図方が作成した街道絵図である。襲封後の萩藩主の初入国行事の一つである「御国廻り」（領内巡視）の順路が描かれている。城下町萩を出発し、日本海沿岸を北上して石見国境の野坂に至り、山代街道を南下して岩国に出て、山陽道を西進して赤間関に至り、響灘・日本海に沿って北上して萩に帰着するまでの、全120里の順路が、折本7巻に仕立てられている。縮尺は5600分の1である。

街道を画面の中心に据え、沿線の自然や集落景観が彩色豊かに描かれ、村名が長方形の枠内に、小字名が小判方の枠内に記されるほか、村境も明示されている。人家や蔵、高札場などの建物・施設は記号印で示され、一目で分かるようになっている。また、名所・旧跡などの由来書も豊富

で、とりわけ寺社の由来に関しては、その別冊解説書「寺社旧記」7冊が備わっている⁽⁴⁴⁾。

「毛利家文庫」に架蔵される7巻は清書であり、控本として萩博物館に4巻（第1・2・4・5巻）が、長門市・八幡人丸神社に1巻（第7巻）が伝わっている⁽⁴⁵⁾。

このうち、八幡人丸神社所蔵本の奥書に「御国廻御行程記此控七巻、諸郡廻郡して調之、寛保式戌九月、行程図筆者有馬喜惣太、由来書筆者岩崎四郎兵衛」と記されることから、寛保2年（1742）9月、6代藩主毛利宗広の御国廻りに際して、萩藩絵図方有馬喜惣太が行程図筆者、萩藩士岩崎四郎兵衛が由来書筆者として作成したことが判明する。

ちなみに、御国廻り行事は7代重就以降に廃止されたため、後々歴代藩主の御国廻りに役立てられることはなかった⁽⁴⁶⁾。

萩藩ではこの「御国廻御行程記」を鎬矢として、「行程記」と題される街道絵図が多数作られている。現在、55巻の所在が確認されている⁽⁴⁷⁾。その内訳は、防長両国内では、御国廻り道12巻、萩往還4巻、別路線3巻の計19巻。藩領外では、山陽道20巻、中山道6巻、東海道（美濃路を含む）5巻、その他別路線5巻の計36巻である。また、防長両国内の別路線では、街道の途中に別の行程記との接続を示す合紋が記されていることから、さらに多数の行程記が作成あるいは計画されていたことがうかがわれ、萩藩絵図方の街道絵図構想が、想像以上に大規模なものであったと推定される。

（山田稔 山口県文書館）

残された課題

大名家史料は、絵図類の宝庫である。大名たちは、自分の支配領域を把握するために村から絵図を提出させ、また国単位の絵図（国絵図）を将軍に提出した。幕府提出用の国絵図とは別に、藩内用の領地図を作成することもよく行った。江戸藩邸では、市販された江戸図や火事を速報する簡易な絵図を購入したり、幕府高官に任じられた大名は、舶来の貴重な文物を優先的に手に入れることも可能だった。

萩藩では、絵図方という、絵図作成についての専門的役職が設けられ、支配空間について視覚化された図による把握・編纂事業が進められたことが大きな特色であった。そのほか、藩主家についての記録編纂を担った密用方や各役所による記録の作成を含め、本論文の対象とした萩藩庁文書を含む、「毛利家文庫」全体のとらえ直しが現在進められている⁽⁴⁸⁾。絵図史料群についても、その点も含め、今後関連文字史料も含めた検討を深める必要がある。

（杉本史子）

本論文は、科学研究費補助・基盤（A）「地図史科学の構築—前近代地図データ集積・公開のために—」（課題番号18202015、2006-2008年度 代表・杉本史子）・同「「地図史科学の構築」の新展開—科学的調査・復元研究・データベース—」（課題番号21242018、2009-2011年度 代表・杉本史子）の研究成果の一部である。なお、本調査については、『東京大学史料編纂所研究報告2009-1 地図史科学の構築 第I部 研究概要、論文・研究報告、データベース概要』、及び『東京大学史料編纂所研究報告2009-1 地図史科学の構築 第II部 原本調査』（2010、東京大学UTリポジトリからWeb公開中）も参照のこと。

注

- (1) 小野寺淳「景観論と絵図研究—絵図学構築のために」(『国学院雑誌』98-3、1997)
- (2) 山口県文書館『毛利家文庫目録 第三分冊』(山口県文書館、1972)
- (3) 山口県文書館「袋入絵図」(『諸文庫仮目録Ⅱ』山口県文書館、1987)
- (4) 山口県文書館「地下上申絵図」(『県庁伝来旧藩記録等仮目録』山口県文書館、1985)
- (5) 例えば、
三浦肇・川村博忠『防長の古地図』解説(山口県立山口博物館、1984)
川村博忠『絵図でみる防長の町と村』解説(山口県文書館、1989)
川村博忠『防長の近世地図史研究』(川村博忠教授退官記念会事業会、1997)
- (6) 山田稔「地下上申絵図の“地下図”について—『舊記細目』による若干の検討—」(山口県文書館研究紀要12、1985)
山田稔「一村限明細絵図清図の図様と接合形態—接合シミュレーションを通して—」(山口県文書館研究紀要24、1997)
山田稔「一村限明細絵図地下図の図様と全体構成」(山口県文書館研究紀要26、1999)
山田稔「『諸役所控目録』にみる萩藩絵図方作製の絵図」(山口県文書館研究紀要35、2008)
- (7) 前掲(6) 山田稔(2008) p.99-100.
- (8) 前掲(6) 山田稔(2008) p.100-101.
- (9) 前掲(6) 山田稔(2008) p.101-103.
- (10) 山崎一郎「明治～昭和戦前期、山口県庁における旧藩記録の保存と利用—毛利家文庫と県庁伝来旧藩記録—」(山口県史研究9、2001)
- (11) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.26.
- (12) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.30.
- (13) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.31.
- (14) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.40-41.
- (15) 広田暢久「毛利家編輯事業史(其の一)」(山口県文書館研究紀要3、p.27、1974)
- (16) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.31.
- (17) 前掲(15) 広田暢久(1974) p.30.
- (18) 山口県立山口図書館『山口県立山口図書館100年のあゆみ』(山口県立山口図書館、年-19、2004)
- (19) 前掲(6) 山田稔(2008) p.103-133.
- (20) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.30.
- (21) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.31.
- (22) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.32.
- (23) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.31.
- (24) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.32.
- (25) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.42-43.
- (26) 山口県立山口図書館『郷土資料目録、追加第二』(山口県立山口図書館、1933)
- (27) 前掲(6) 山田稔(2008) p.117.
- (28) 前掲(6) 山田稔(1997) p.68.
- (29) 前掲(10) 山崎一郎(2001) p.28.
- (30) 前掲(6) 山田稔(1985) p.68-71.
- (31) 前掲(6) 山田稔(1985) p.59-60.
- (32) 前掲(6) 山田稔(1999) p.1.
- (33) 前掲(6) 山田稔(1999) p.11.
- (34) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』(古今書院、1984)
- (35) 川村博忠(1997)

- 河村克典「周防長門両国『国絵図』関係史料」(山口県文書館研究紀要26、1999 a)
- 河村克典「毛利家文庫『元禄周防・長門国絵図』の性格」(山口県地方史研究81、1999 b)
- 喜多祐子「正保国絵図における支配領記載について—周防・長門両国を事例に一」(歴史地理学41-5、1999)
- 喜多祐子「周防国」「長門国」(国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、2005)
- (36) 山本博文『江戸お留守役の日記—寛永期の萩藩邸一』(読売新聞社、1991)
- (37) 山口県文書館蔵。
- (38) 「吉敷郡村絵図相紋図」(地下上申絵図492)、「周防図玖珂郡岩国領村敷図」(袋入絵図54)。山口県文書館蔵。
- (39) この場合は内容年代。
- (40) 山田稔「『一村限明細絵図』に関する三種類の台帳について」(山口県文書館研究紀要32、2005)
- (41) この場合の総数は、副図の一部を含むため395枚。
- (42) 下関市立豊田文化財資料室蔵。『西山家文書(八道村庄屋文書)(四)』(同資料室刊、2007)。
- (43) 山口県文書館蔵。
- (44) 「御国廻御行程記」は毛利家文庫・地誌、「寺社旧記」は、同文庫・社寺に分類架蔵されている。山口県文書館蔵。
- (45) これらの控本は、萩町立明倫館図書館旧蔵。人丸神社のものは、その流出本である。山田稔「『御国廻御行程記』とその異本について」(山口県文書館研究紀要25、1998)。
- (46) 山本正大「萩藩主の御国廻り行事について」(史都萩32、1975)
- (47) 山田稔「近世街道絵図『行程記』の路線図について」(山口県文書館研究紀要36、2009)
- (48) 山崎一郎「毛利家文庫の形成過程と文書群構造」(山口県文書館研究紀要37、2010)